

雨の狩人

装幀 多田和博
装画 西口司郎

夕方からの雨は最悪だ。それもあたたかい梅雨どきならともかく、きのう木枯らし一号が吹いたとニュースでいっていた、この時分の雨は、商売と体の両方にこたえる。

とりあえず着物の下に毛糸のモモヒキをはき、使い捨てのカイロを貼りつけてきた。下駄げたにも貼つてあるが、足袋たびをはいた爪先は寒さでとうに感覚がなかった。

目の前の新宿区役所通りは、少し前まで出勤するキャバ嬢や、若いサラリーマンでにぎやかだったが、十時を過ぎてからはさっぱりだ。客引きも所在なげにビルの軒下に立っている。

この道に立つ客引きは、靖国通りに近い入口から、アフリカ人、中国人、日本人と、微妙に縄張りを分けている。それぞれがいったいどんな店に客をひっぱりこもうとしているかは知らないが、初めて黒人の客引きを見たときユリ江は仰天したものだ。

なぜこんなところにアフリカ人が、それも何人もいるのだろう。しかもそいつらはどうやら働いているようなのだ。カタコトの日本語で、道いく男たちに声をかけている。

白人ならいろんな国の人間がいるのはわかるが、ユリ江にとつて黒人といえばアメリカ人だった。若い頃、六本木のディスコに連れていかれ、そこには黒人がいっぱいいた。横須賀にアメリカ軍の空母が寄港したからだ、と当時つきあっていた男が教えてくれた。

なつかしい。あの頃は二十代だった。高校を中退して喫茶店のウェイトレスをやり、それからホステスになった。だが酒が飲めず、さんざん苦しい思いをして、割烹かつぼうの仲居に転職した。バブルの頃で、どこもかしこも景気がよかった。板前のひとりと一緒にになり、借金をして小さな居酒屋をもった。二、三年はうまくいっていた。だがバブルが崩壊し、あつという間に店は駄目になり、亭主は山形の田舎に帰るといった。

そんな田舎暮らしはまつびらだ。ユリ江は東京生まれの東京育ちなのだ。亭主と別れ、スナックに勤めた。そのママが古い好きで、飲めないユリ江でも、店の運気を上げる星をもっている、と雇ってくれたのだ。ママの占いは、手相と名前の字画で、よく当たると評判だった。占ってもらいたいと、地方からくる客もいたほどだ。

そのママが六十三であつけなく死んでしまい、ユリ江は途方にくれた。

ママがいなければ店はたちいかない。ママの男だった七十近いバーテンと自分の二人では、とうていやつていけないからだ。店は、今ユリ江が机をだしている区役所通りのすぐ裏、オレンヂタウンにあった。五坪もない、小さな店がまるで長屋のようにぎっしりとたち並ぶ一角だ。おかげでオレンヂタウンには詳しくなかった。

白布を張った机には、「運命鑑定 あなたの道を教えます」と「お店のわからない方、おたずねください。オレンヂタウンの道案内いたします」と書いた二本ののぼりが立っている。

初めは、ここではなく、歌舞伎町のもつと奥、ホテル街の近くで机をだしていた。地回りや警官にはさんざん威きされたが、退ひかなかつた。たまたま割烹時代の客に、当時の新宿のいい顔がいて、その人の名をだせば、たいていの地回りはひっこんだ。

だが健康プラザのハイジアが建つたのと、東京都による浄化作戦のおかげで人の流れがかわってしまった。い、より客を求めて、区役所通りに移ってきたのだ。

「占っていきませんか」

前を通りかかった、明らかに不倫とわかる、年齢差のあるカップルに声をかけた。不倫カップルの女は、客になりやすい。いい結婚相手が見つかるなら、どこかで今の関係を清算したいと願っているからだ。

数年前の世界同時株安のときは、急に四十代、五十代のサラリーマンの客が増えた。

俺、どうなつちやうんだ？ 会社、潰れるかい？

いい年をした男が、真顔でそんなことを訊いてきたものだ。

会社の経営のことまではわかりませんが、あなたの運気を観るともうひと花咲かせられる相があります。

相があるからといって必ず成功できると保証しているわけではない。そこは「逃げ道」だ。客は「絶対」という言葉を欲しがるが、ユリ江は口にしない。うまくいかなかったとき、責任をとれとねじこんでくる人間がいるからだ。

占い師のあいだでは、自殺しようかと迷っていた客に、「きつとやり直せます」とある占い師が教えたら、数年後大成功して、百万円をもらったという噂がある。都市伝説のようなものだ。そんなうまい話があるわけがない。だいたい人は金持ちであればあるほど、ケチなのだから。

今は占いに金を使う客すら減った。もともとが辻占というのは、遊びなのだ。

酔っぱらって悪戯心を起こし、「ちよつと俺のこと占つてよ」と、手をつきだしてくる。

当たるも八卦、当たらぬも八卦、とはよくいったものだ。

手相と姓名で観えたことのうち、いい話をしてやり、男の場合なら必ず健康問題で釘をさす。

お酒を少し控えたほうが、ものごとがうまくいくと思いますよ、とか、睡眠不足が気になりますね、いざというとき体が動かなかつたら大事な転機を逃します、といって締めるのだ。

女の場合難しいのは、自分の話だけではおさまらないところだ。恋愛や結婚はもちろんだが、職場の人間関係について相談してこられると、手間がかかる。その相手の年齢や名前を聞き、たいていは、「あなたにも心を閉ざしているところがあるから」といつてかたづけける。

男とちがひ、女は、最初のアドバイスがツボにはまると、常連になることがあるので、うまくやらなければならぬ。

人は皆、自分を知らりたい。未来の自分はもちろんだが、今の自分が「本当は何をやりたい」のかすらわからない人間も多い。

占いが遊びだと思ふのは、そういう、自分がわからずに不満をためている人たちのガス抜き役割を果たしているからだ。カラオケを歌つて騒いだり、バッティングセンターでバットをふり回して（この通りの先にあるバッティングセンターでは、夜中の二時三時に真剣に球を打っている客が絶えない）、日頃の憂さを晴らすのと、占いは実は同じなのだ。

顔を寄せあい、ひそひそとインテイメイトに人生について語りあう。これまで一度も会つたことのない人間どうしが、数千円でそんな時間を共有できる場合は、他にない。

インテイメイトが「親密」という意味だと教えてくれたのは、サチコだった。サチコとはいつてもタイン人で、本名はチャライラットとか何とかという名で覚えられなかつた。歌舞伎町のクラブで働いていてホテル街の近くでユリ江が机をだしているときに知りあつたのだ。日本語がうまくて、氣立てのいい娘だった。日本人の男とのあいだに娘がいる、といつていた。その男といつしよになれるかどうかを占つてほしいといつてきたのが、きつかけだ。

正直、相はよくなかつた。当時は今よりはつきりいうことが多かつたユリ江は、「難しいかもしれない」とサチコにいつた。

サチコはひどく悲しそうな顔をした。

「あんたの香水、いい匂いだね」とユリ江が話をそらすと、「インテイメイト」という名だと、教えてくれた。意味は「親密」。

サチコはよくタコ焼きや焼きイモをもつてきてくれた。店が終わり、アフターに行く客がいないとき、始発電車がでるまでの時間潰しに、占ってもらいたがった。

何回かつづいて、ユリ江は金をとるのをやめた。辻占というのは、人が立っていたほうが、客を呼ぶからだ。行列ができていればなおいい。「よく当たる占い師だ」と勝手に思ってもらえる。サチコと話してこんでいると、自分も占ってほしいようなホステスが立ち止まることがあった。サチコはにつこり笑って、「どうぞ」と位置を譲る。そして「よく当たるヨ、このお姉サン」といつてくれるのだった。

サチコは二年間、ユリ江の客だった。そしてある日現れ、タイに帰る、といった。十二歳ぐらいの娘を連れていた。黒目の大きなかわいい子だった。

「お姉サン、タイに遊びにきて」

住所と名前をローマ字とタイ語で書いた紙をもらった。それは今も財布に入っている。ときおり、サチコを訪ねてタイにいかうかと考えることがあった。今よりは客がいたし、小金も貯められた時代の話だ。

だがもう、できない。この頃は、ひと晩客なしが週に何度もある。外国遊行なんて、夢みたいな話だ。それに今では、新宿が外国のようなものだ。

ユリ江は机に固定した傘の下でため息を吐いた。あれからもう八年だ。サチコは日本語も、ユリ江のことも、忘れてしまったろう。

目の前に若い娘が立った。パーカーのフードをかぶり、両手を前のポケットにつっこんでいる。およそ金をもつていなさそうだ。

「いらつしやい。占つていきますか？」

それでもユリ江は訊ねた。娘は無言だった。ただユリ江を見つめている。「どうしたの」

「お姉さん、ユリ江？」

娘はいった。浅黒いがきれいな顔立ちをしている。

「そうだけど？」

娘がにっこりと笑った。

「わたし、サチコの子供です」

2

吉崎よしざきはカウンターのストウールから床に転げ落ちたような格好で死んでいた。長年射ちつづけた覚せい剤しやせいやげとはとうとう縁が切れなかったようだ。死後半日かそこいらしかたっていないのに、まるで骸骨のように見える。

「シヤブ中だな」

四谷署の立木たちぎがいった。

「ああ。組もそれで破門になつてる。もう六年前だ。尾引会おびきかいだ」

佐江さえは答えた。

「尾引会つて潰れたのじゃなかったっけ」

立木は手袋をはめた手で、吉崎の上着を探りながら訊ねた。

「一昨年おとししな。シノギがやってけないつて、組長が解散届けをだした」

佐江は鑑識の撮影の邪魔にならない位置でカウンターに寄りかかっていた。狭い店だから、五人も入

ると、残りは開けはなつた扉の外に立つ羽目になる。張り番をする制服警官の向こうには野次馬が集まっていた。

「外傷はねえな。血もでてない」

立木は独り言のようにいった。佐江は無言だった。今いる店は、オレンヂタウンの花見小路の中ほどにあった。

オレンヂタウンは、昭和二十年代に、旧都電線路沿いに発展した飲み屋街だった。最初は立ち退きを命じられた闇市の移転先で、その後封鎖された赤線から娼家が何軒も移ってきた。造りが二階建てなのはその名残りで、一階で酒場や割烹の体を装い、二階で女が客をとっていたからだ。

それも昭和四十年頃になると、ほとんど酒場か居酒屋になった。昭和四十年代から五十年代にかけては、学生や演劇、映画関係者が飲みに来る街として、存在が知られるようになった。左翼活動家のアジトとなつた店もある。

歌舞伎町の東端、東西五十メートル、南北二十メートルほどの一面に、全盛期は二百軒以上の飲食店が並んでいた。長屋のようにつながつた造りが多く、空から見ると大きな一軒の建物のように見える。錆びたトタン屋根がオレンヂ色をしているところから、「オレンヂタウン」と呼ばれるようになった。

オレンヂタウンは四つの区画に分かれていて、それぞれ「柳小路」「花見小路」「さくら小路」「よみせ小路」と名づけられている。

昭和の終わり、バブル経済只中のとき、このオレンヂタウンを地上げしようという動きがあつた。

戦後闇市の流れを汲む、この街の権利関係は異常に複雑で、店舗のまた貸しはあたり前、狭い土地に何人もの地主がいて、その上、何重もの抵当に入っているという状況で、地上げは困難を極めた。

それでも新宿歌舞伎町という立地を考えれば、地上げを成功させた者は大きな実りを得られたろう。だがバブルが崩壊し、地上げは頓挫した。立ち退きに応じた店は再開されることなく、ベニヤ板で扉

が釘打ちされ、まとまった一面は駐車場などになっている。今では営業している飲食店は百五十軒程度といわれている。

住居表示でいえば歌舞伎町だが、このオレンヂタウンは新宿警察署の管轄ではない。

旧都電線路跡、現在は「四季の路」と名づけられた区立の遊歩道公園を境に、東側は四谷警察署の管内なのだ。

佐江がいるのは、立木に携帯電話で呼ばれたからだだった。オレンヂタウンの酒場でマルＢらしき男の変死体が見つかり、暇なら顔をだしてくれ、と頼まれたのだ。

佐江は、新宿署組織暴力対策課、通称「組対」のベテラン刑事だ。四十を過ぎていて、腹はでつぶりとでている。シャツの前やネクタイには食べこぼしの染みがあり、煙草を吸えない場所ではたいてい楊枝をくわえていた。

新宿署からそろそろ異動になっておかしくないのだが、いつこうにそうなる気配はなかった。理由は、反抗的な態度で嫌われているからだとも、新宿のマルＢをそれこそひとり残らず知っているので、頼りになりすぎて動かせないからだとも、いわれている。

佐江にとってはどうでもいいことだった。

トバされたらトバされたでかまわない。そろそろ足腰にガタもきているから、内勤を命ぜられたら、うんと楽をしてやろうくらいにも思っている。

警視庁に勤務する四万人以上の警察官の中では、下から数えたほうが早いクズだというのは自覚している。誰に対しても横柄で、口のきき方を知らず、暴力をふるったり発砲することにも、ためらいを感じない。

だが取引をすることはあっても、買取には応じない。上と仲よくするくらいなら、いつも小突き回しているチンピラとつるんでいるほうがよほど楽だ。もちろんそうしたがるチンピラなど、新宿にはひと

りもないのだが。

要するに、誰からも好かれぬ刑事なのだ。好かれぬからこそ、遠慮会釈なく仕事ができるのであって、人気とりに励みたいなら、芸人か政治家にでもなればいい、と考えている。

「破門されてからのシノギは何だった？ 売人か」

立木が立ちあがった。どうでもいい、という口調だった。吉崎の死因が殺しだろうが病死だろうが、いなくなつたことでほつとする人間はいても、悲しむ人間などひとりもない、と決めつけているようだ。

「それもちよろちよろやつてたが、メインはここだ」

佐江は答えた。

「ここ？ このうすぎたない店か」

立木は驚いたように店内を見回した。カウンターにストウールが五つ並んだだけで、ほこりだらけの酒棚に、安い焼酎とウイスキーのボトルが並んでいる。

「すわつて千円。ボトルは五千円」

佐江は答えた。

「酒場のオヤジをやつていたのか」

「たまにとびこみがくると、ぼつたくつたつて話もある。せいぜい二万か三万だが」

「なんで組を破門になつたチンピラが店をやれたんだ」

「こいつのお袋がここをもつていたんだ。元は青線の女で、働いていた店を買つて酒場にした。組を破門になつた頃に、脳卒中で死んで、こいつがここに転がりこんできた」

「詳しいな。さすがだよ」

あきれた口調で立木はいった。佐江は無言だった。ときどき飲みにきていたのだ。吉崎の母親の作る

おでんが嫌いではなかった。

「現役時代、もめた奴やつはいたのかい」

立木は吉崎の上着からとりだしだした財布を、カウンターのうえで開いた。一枚の万札と千円札が二枚。あとは風俗店の会員証らしきカードが何枚かだ。

「恨みを買えるほどの根性はなかった。気弱で、何かあるとすぐシャブに逃げてた。一度てんばって事務所で包丁ふり回し、それで破門になった」

立木は首をふった。

「終わってんな、それは。誰かしら巻き添えにしないでくたばって、むしろよかった」

「立木さん」

カウンターの内側を調べていた若い刑事が声をかけた。注射器をつまんでいる。

「どこにあった」

「流しの下のごみ箱の裏です。テープで貼りつけた跡がありました」

「パケは？」

若い刑事がゴミ箱を傾けた。ビニールの小袋の切れ端が入っている。

「それを調べろ。混ぜものに反応したのかもしれない」

立木はいつて、同意を求めるように佐江を見た。覚せい剤の水増しに多く使われるのはグルタミン酸だが、悪質な卸し元だと他の化学薬品を使うこともある。吉崎ほどのベテラン中毒者が、粗悪品をつかまされたとは思えないが、取り締まりの影響で品薄になり、我慢できず手をだしたという可能性もあった。それに体がアレルギー反応を起こせば、死ぬ場合もある。

「解剖してみるんだな」

佐江はいつた。立木は舌打ちし、死体を見おろした。

「シャブ中のクズを解剖するのに、税金使うのか」

佐江は答えず、寄りかかっていたカウンターから体を起こした。

「じゃ」

「手間かけました。恩に着ます」

立木は口調を改め、頭を下げた。佐江は手をふって、店の扉をくぐった。野次馬の数は二十人近くいた。

その輪を抜けて区役所通りに向け歩きだすと、男がひとりついてきた。まだ昼過ぎで、オレンヂタウンの店はどこも開いていない。

吉崎の死体を見つけ通報したのは、週に一回配達をしている酒屋だった。

オレンヂタウンを抜けて区役所通りにぶつかると、佐江は足を止めた。向かいに新宿区役所の建物がある。日本広しといえども、盛り場のどまん中に区役所が建っているのは新宿くらいのもだろう。

区役所と警察署の位置をとりかえりやいいのに、とよくいわれる。西新宿にある新宿署が歌舞伎町に移転したほうが、よほど業務に便利だろうというのだ。

だが夜の区役所通りは違法駐車と客待ちのタクシーで渋滞している。緊急出動するパトカーが身動きできなくなるだろう。

それに新宿署がJRの線路をはさんだ反対側にあるからこそ、歌舞伎町は盛り場として発展したのだ。警察のお膝元を喜ぶ、飲食店業者や酔っぱらいはいない。

佐江はくるりとふりかえった。

「何だ」

ついてきた男を見つめた。よれよれの茶のスーツにハイネックのセーターを着て、ショルダーバッグをかけている。メタルフレームの眼鏡のレンズがひどく曇っていて、その奥の目をきよろぎよろと動か

していた。五十になつたかならないかというところだろう。

男は唇をなめ、佐江を見返した。

「何か、用ですか」

佐江は口調を改めた。カタギだが、ふつうのサラリーマンには見えない。

「あ、あんた、刑事だろう」

「そういうおたくさんは？」

「俺のこと、俺のことはどうでもいい。いい、いい情報があんだ」

同じ言葉を早口で二度くり返すのは、緊張している証拠だろう。

「さっきの店のことなら、管轄がちがうんですよ。戻つて、別の刑事さんに話してください」

「あ、あんた、新宿署じゃないのかい」

「新宿署です。さっきのあそこは四谷署の管轄です」

男は唇をねじ曲げるように、

「新宿だよ」

と、つぶやいた。

「何が新宿なんです？」

「新宿で、いっぱい、人が死ぬぜ」

佐江は息を吸いこんだ。男は佐江が真にうけたからか、得意げな顔になつた。

「これから、上げえことが起きるぞ」

佐江は首をふつた。

「新宿じゃ、毎日、誰かしら死んでる。それがすごいことですか」

男は目をみひらいた。

「俺、俺が、つきとめたんだ。でかい金が動くんだ。それでもって、人がどんどん死ぬ」

「そのことと、さっきの店の件と、何か関係があるのですか」

「か、考えろよ。刑事だろ」

佐江は煙草をくわえ、火をつけた。この一年、携帯灰皿をもち歩くようになった。

「金が欲しいのか」

男を見つめた。男は首をふった。

「俺が記事にするんだ」

「記者か、あんた」

「そうだよ」

「どこの雑誌だ？ 俺は佐江。あんたの名前は？」

「フリーだよ。名前は、岡おかってんだ」

「岡さんか。その記事が載ったら教えてくれ。読みたいから」

「信じないんだな。信じないんだろ」

怒ったように岡はいった。

「いいかい、岡さん。この街じゃね、毎日どこかしらで、でかい金儲かねもちけの話がとびかってる。合法、非合法を問わず、でかい金が動くとなれば、必ずしもめごとも起きる。だから、あんたの話を信じないとはいわない。問題は、俺が何か役に立てるかどうかだ。あんたは俺が役に立つと思うから、話してくれたんだろ」

岡の相手をしているのは、佐江の勘だった。吉崎が殺されたにしろ、事故死だったにしろ、佐江にとつてはたいした問題ではない。が、どんだん人が死ぬといわれたら、知らん顔はできない。

「あんた、俺の保険になるか」

岡は人さし指を佐江に向けた。

「ほけ、保険になるんなら、話してやる」

「それは何か、あんたがヤバイ連中のところについて、俺の名前をだすってことかい」

岡は何度も頷いた。

「危ねえんだ。今、調べてるのは。だからいつ消されるかもしれない。あんたの名前でしたら、俺は大

丈夫か」

佐江は苦笑した。

「相手によるだろうな。俺の名前をいったとたん、袋叩きにされるかもしれん」

岡は瞬きした。

「な、なんで」

「恨みを買っているからさ」

岡は理解できないというように佐江を見つめた。

「とにかくもうちよつとヒントをくれよ。何が理由で、人がどどん死ぬんだ？」

岡は首をふった。

「今はいえないね。新宿署の佐江さんだな。何かあったら電話する。それでいいな」

「ああ、いいよ」

つい癖で、煙草を地面に落とし踏みにじってから、佐江は舌打ちをした。拾いあげ、携帯灰皿にしま

う。

顔を上げると、岡の姿はなかった。いつのまにか消えている。そんなにすばやい身のこなしをしているようには見えなかったが、うしろ姿すら、佐江の視界に入らなかった。

「何だよ」

佐江はつぶやいた。岡が知りたかったのは、佐江の名前だけだったようだ。佐江は首をふり、新しい煙草に火をつけた。

3

ふだんはキャバラとして使われている店だがテーブルはすべて撤去されていた。椅子だけが、店の片側にぎっしりと並べられている。しかも照明は煌々^{キラキラ}と点^{とも}され、とうのたつたキャバ嬢なら、「勘弁してよ」とスタツフにかみつきたくなるくらい明るい。

日曜日で店は休みなのだが、椅子には男女あわせて七十人くらいが腰かけている。

並んだ椅子と、残り半分の店のスペースのあいだに、細長いテーブルがおかれ、シャンペンや赤ワイン、ウイスキー、焼酎のボトルに氷とグラス、水差しが用意されていた。

細長いテーブルの向こうに、ロープで低いポールをつなぎ、マットをしきつめた簡易式のリングがあった。そこに上半身裸の四人の男たちが並んでいる。ひとりはモヒカン刈りで眉を剃り落とし、ひとりは全身にタトウをびっしりと入れ、ひとりは長髪で甘い顔立ちをしていて、ひとりは坊主頭で生氣のない目を下に向けていた。

大音量でかかっていた有線放送のロックのポリュームが絞られた。

椅子の最前列にかけていたスポーツウェアの大男が立ちあがった。髪を剃り、顎ヒゲをのぼしている。白いTシャツの前で大きな十字架が揺れていた。

「お待たせしました。SUF^{エヌイチエラ}、今期第三戦を開催いたします。出場選手は、SUFライト級昨年度チャンピオン、サイドワインダーニシキ」

モヒカン刈りが薄いグローブをはめた拳をつきあげ、わずかな拍手が湧いた。

「横浜のケンカ王、ゴンザレス・ハマ」

タトウの男が挑戦的な視線を客に向ける。とたんに、

「目つきが悪いんだよ、こら」

野次が飛び、どつと客が沸いた。

タトウの男がリングの外に向かつて踏みだしかけた。それを大男は片手で止めた。

「三人目は、ご存知、新宿ホストの実力派、煌志」

きやーつという悲鳴に似た歓声が複数あがった。若い女性客たちだ。長髪の男は軽く手をふり、ウイ

ンクをした。首を左右に傾ける。

「四人目、これがS U Fデビュー戦となる、元J W J所属、鬼頭トモヒサ」

生気のない目をした男が、おぎなりに両手を掲げた。

「何だよ、三流レスラーかよ」

「八百長ばっかしてたのが、アンダーで勝てると思うなよ」

「病院送ってやれ、病院に」

「殺したっていいぞお」

激しい野次が浴びせられた。客の大半は酒の入ったグラスを手にしている。観戦料はひとり二万円、酒は飲み放題、それとは別に勝者に金を張ることもできる。的中は倍返しだ。

「ルールはS U F公式にのつとり、目と金的への攻撃は禁止。制限時間なし。ギブアップか、レフェリーによる続行不能のジャッジまで試合をつづけます。万一、死者がでて、S U Fは一切関知いたしません。よろしいですね」

大男は四人をふりかえった。四人は無言で頷いた。

「それでは第一試合、ゴンザレス・ハマ対鬼頭トモヒサを開始します」

全身タトウの男と生気のない元プロレスラーがリングで向かいあつた。ゴングが鳴る。

「こいよ、でぶ」

タトウの男が元プロレスラーを挑発した。元プロレスラーは無言でつつ立つている。

「こねえならこつちからいくぞ、こら」

タトウの男が回し蹴りを放つた。ズン、という音とともに蹴りは元プロレスラーの右肩あたりにあつた。元プロレスラーの体がわずかに揺れた。

「おらあ」

タトウの男はたてつづけに蹴りを放つた。肉に肉がぶつかる、ズン、ズン、という音がつづいた。タトウの男の体がうつすらと汗ばみ、見る見る元プロレスラーの肉体が赤く腫れ始めた。

何度めかその蹴りをうけたとき、元プロレスラーの膝が折れた。マットにひざまずく。

「どうした、どうした、ほら」

「やる気あんのか、おい」

「ぶつ殺しちまえ」

野次が浴びせられた。タトウの男が元プロレスラーの首に向かつて蹴りを放つた。それを元プロレスラーの腕がとらえた。バランスを崩したタトウの男の体をマットの上にひきずり倒す。元プロレスラーの腕がタトウの男の足首を固めた。体重をかけ、関節を決める。

タトウの男が悲鳴をあげた。

「はなせ、この野郎！」

ぱつと元プロレスラーは手をはなした。驚いて目を丸くしたタトウの男の首をつかみ、顔面に頭突きを浴びせた。

噴水のように鼻血が飛んだ。店内が静まりかえつた。元プロレスラーは立ちあがると、タトウの男の

体を抱えあげ、背中からマットに叩きつけた。

タトウの男は呻いて、体をくの字に折った。その上に膝から元プロレスラーはとび乗った。タトウの男が腹をつかみ、転げ回った。レフェリーが駆け寄り、

「ギブアップ!？」

と訊ねた。タトウの男は首をふり、まっ赤な目で元プロレスラーをにらみつけた。

「お前、本気で殺す」

手の甲で鼻血をぬぐい、元プロレスラーに突進した。元プロレスラーはそれをかわすとタトウの男の首に腕を巻きつけた。足首をタトウの男の足にひっかけ、絞めあげる。

タトウの男の顔がまっ赤になった。必死に足を外そうとし、元プロレスラーの腕を殴りつける。だがびくともしなかつた。

「オーケー！ オーケー、オーケー！」

タトウの男の足が痙攣し始めるのを見たレフェリーが割って入った。元プロレスラーの肩を叩き、腕を外そうとする。元プロレスラーは、ぼんやりとした目でレフェリーを見やった。

「ストップ、ストップ！」

元プロレスラーはようやく腕をほどいた。タトウの男はマットの上に崩れた。白眼をむき、舌がとびだしている。

セコンド役の男たちがタトウの男の体に駆けよった。頬を張り、それでも足りないを見ると、胸を押す人工呼吸を始める。

「ウイナー、鬼頭トモヒサア」

レフェリーが元プロレスラーの腕を掲げた。

まばらな拍手が湧いた。

「ヤバーい、煌クン殺されちゃうよ」

「反則だろう、やつばプロは……」

激しく咳きこみながら、タトウの男が意識をとり戻した。同時にマットの外に激しく嘔吐した。

「どうした、ハマのケンカ王」

「ザマないな、おい」

容赦のない野次が浴びせられる。

タトウの男が連れだされ、元プロレスラーも店の裏手にさがると、スポーツウエアの大男が立った。

「アンダーでも、意外とプロはいけるってことが証明されましたね。ゴンザレス君に賭けたお客さんは残念でした」

小さな笑いがあがった。

「では第二試合、サイドワインダーニシキ対煌志」

モヒカン刈りと長髪がリングで向かいあつた。長髪もさすがに今度は歓声に応える余裕がないのか、モヒカン刈りとにらみあつている。

「もちろんSUFは八百長なしのガチンコですから、煌志君が当分お客さんの前にでられなくなつても、休業補償はいたしません」

どつと場内が沸いた。

「だいじょーぶ！ 私が食べさせてあげるから」

女の声があがり、また沸いた。

「そりゃあ心強い。そういうことなら、お互い遠慮なく戦えるというものだね」

ゴングが鳴り、スポーツウエアの男は椅子に腰をおろした。隣にはネクタイなしでスーツを着た男がいた。

第二試合の開始と同時に、場内は悲鳴と歓声の渦となった。

「顔はやめてえ」

「ぶつ殺せ、ぶつ殺せ、ぶつ殺せ」

「煌志クーン！」

スポーツウエアの男とスーツの男は顔を寄せあい、話しこんでいた。やがてスーツの男が上着から携帯電話をとりだし、耳にあてた。が、顔をしかめ、立ちあがった。場内の声が大きすぎて聞こえないのだ。客席から離れ、店の隅に移動する男を、二人の男が追った。

ボディガードだった。スーツの男は店の隅でも話ができず、ボディガードをふりかえると、出入口の扉を示した。

出入口の扉をスーツの男とボディガード二人はでた。扉の外には別の男が立っていた。

「ご苦労さまです」

スーツの男に頭を下げる。それに片手をあげ、スマートフォンを耳にあてたまま、スーツの男は廊下を歩いた。

飲食店ばかりの雑居ビルだが、日曜ということもあって、廊下は静かだった。

「ああ、聞こえる」

スーツの男はいつて、廊下の端、エレベーターホールまで歩いていった。ボディガード二人は、見張りの男とともに出入口の前に残った。

「だからその件は話を通つてんだ。今さらガタガタいわれる筋合いはねえよ」

チン、と音がして、スーツの男は背後をふりかえった。エレベーターがその階で止まったのだった。

不意に激しい銃声が廊下にひびき渡った。スーツの男は突風にあおられたように反対側の壁に体を叩きつけ、ずるずると崩れ落ちた。

「社長！」

ボデイガードのひとりが叫び声をあげ、走った。エレベーターの扉が閉まった。

走りよったボデイガードの足もとに血だまりが広がった。エレベーターは下降していた。一階で止まる。

「社長おっ」

スーツの男は目をみひらいたまま、微動だにしなかった。白いシャツの胸がまっ赤に染まっていった。

4

野次馬の数は、オレンヂタウンの比ではなかった。日曜日とはいえ、夜の歌舞伎町には多くの人間が集まる。雑居ビルの出入口を封鎖したテープとパトカーの周辺には二百人近くが集まっていた。

制服警官に手をあげ、佐江はテープをくぐった。ビルに入って正面のエレベーターホールに鑑識の係員がいて、停止させたエレベーターの箱の中を調べていた。それを見て、佐江は立っている巡査に、

「何階だ、現場は」

と訊ねた。

「七階です」

「エレベーター使えないのか」

巡査は頷いた。

「冗談じゃねえぞ。七階まで階段であがれつてか」

「そうするしかありません」

腰に手をあて、佐江は首をふった。

「非常階段は、左の奥です」

「捜査がいい添えた。」

「お前、かわりにいつてくれ」

「え？」

「冗談だよ、くそ」

五階の踊り場で一度休んだが、七階にあがったときは息があがっていた。非常階段と廊下を隔てる扉は開け放たれていて、佐江は扉に寄りかかって息を整えた。

「きついだろ」

扉のかたわらに新宿署刑事課長の前田がいた。死体のあるらしいエレベーターホール周辺には鑑識や腕章を巻いた刑事が群がっている。

「なんで俺を呼んだんですか」

佐江は前田に訊ねた。

「呼んだのは俺じゃない。捜一、のご指名だ」

「機捜とぼして、捜一ですか」

事件性の高い事案の初動捜査は、通常、機動捜査隊が担当する。機捜の初動捜査で容疑者が判明しなかつたり、事案に重大性が見られる場合は、警視庁の捜査一課にひきつがれる。

「マル害について、お前の知識が欲しいそうだ。もう大丈夫か」

佐江が頷くと、前田は大声をだした。

「管理官、きました」

佐江は両膝に手をあて、体をのびした。上着からだした手袋をはめ、人だかりに歩みよった。新宿署と捜査一課あわせて、二十人以上の刑事が、佐江に道を空けた。

廊下の壁に背中を半分預けて倒れている死体が目に入った。二メートル四方に血だまりが広がり、固まりかけている。

「おっと」

それを踏みそうになり、佐江は足を止めた。

マスクをはめへアカバーをかぶった作業着の鑑識係が、ビニール製のシューズカバーをさしだした。

「踏んでもいいですが、靴がよごれるのが嫌なら使つて下さい」

佐江は無言でシューズカバーをはめた。誰も何もいわない。血だまりを踏んで、死体のかたわらまで歩みよった。

「佐江さんか」

しゃがんでいるスーツの男が、マスクの下から訊ねた。

「そうです」

「管理官の白戸しらとだ。ご苦労さん」

管理官は警視で、現場の指揮をとる。

「いえ」

「知つてる顔か」

「マルBじゃないですね。管内のマルBなら知っていますから」

死体は四十をでたかでないかというあたりで、目を大きくみひらいている。第二ボタンまで外したシヤツの胸もとから、肩に入れたタトウがのぞいていた。それを見て、佐江はおう、と声をだした。

「髪をさっぱりしていやがったから気がつかなかった。高部たかべですね」

白戸は頷いた。

「所持していた免許証も、高部ひとし斉という名だった。フロントか？」

「どこかの組のフロントとはちがいます」

佐江はいつて、シャツの前を指先で広げた。

弾丸の射入孔が、血まみれの胸の中心とやや左にふたつ並んでいた。

「ほぼ即死でしょう。ほしは、ここで電話をしていたマル害をエレベーターの中から撃ち、そのまま降りたようです」

白戸のかたわらに立つた男がいつた。プレスのきいた黒いスーツを着て、ネクタイを締めている。手袋ははめているが、マスクはしておらず、短かめの髪をきちんと七・三に分けていた。細身でやけに色が白い。年齢は佐江と同じか、少し上くらいだろう。

「一課の谷神たにがみです」

佐江が目を向けると、七・三の男はいつた。

「新宿署組対の佐江です」

佐江はいつて白戸に向きなかつた。

「高部は、三年くらい前に新宿に現れ、居酒屋とキャバクラであてて、不動産にも最近は手をだしていません」

白戸は首を傾かたげた。

「元手は？ 組、関係じゃないのか」

「組、関係から流れていたとすれば、不動産を扱うようになってからでしょう。最初に始めたときの元手は、詐欺か闇金で貯めたのじゃないかとにらんでました」

佐江は答えて、高部の死体を見おろした。目をみひらき、撃たれた驚きがそのまま凝固した表情だった。

振りこめ詐欺は、使用する電話や年寄りのリスト、偽名の銀行口座、「だし子」と呼ばれる現金の引

きだし係に至るまで、手法がセットで売買の対象にされている。

半年から一年、そのセットを使つて荒稼ぎしたグループが、次にやりたいグループに売り渡すのだ。誰かがつかまれば、セットは商品価値を失うが、つかまらなければ、また別のグループに売り渡される。振りこめ詐欺が始まったのは、もう十年以上も前なので、その頃荒稼ぎをした連中は、とうにセットを売り渡し、儲けた金で、多くは飲食店か金貸しに商売がえをしている。

高部がそういうひとりではないかと、佐江はにらんでいた。初期の振りこめ詐欺グループには、機材と人員の調達で暴力団と組んだ者がいたが、一切暴力団とかかわらなかつた者もいる。

それはかなり賢く、人脈をもつた連中で、暴走族やチーマーと一時呼ばれた愚連隊のOBなどで構成されていた。

かつては、暴走族や愚連隊は地元の先輩後輩などの人間関係から暴力団に吸収されていくのが相場だった。

が、組織犯罪処罰法や暴力団排除条例などで傾向がかわつた。組に属することがもはや利益をもたらさず、逮捕されても罪は重いし仮釈放も得られないなど、マイナスが多いことに、ガキのワルどもは気づいたのだ。

組に所属していると、商売も始められず、部屋を借りることすらできない。

こうした封じこめは、すでに存在している暴力団には確かに効果があつた。シノギと呼ばれる収入手段を断てるからだ。だが、犯罪で手つとり早く金を稼ごうと考えているのは暴力団だけではなく、そういう連中は暴力団に入らずに犯罪集団を形成したり、暴力団の役に立つてやることで収入を確保するようになった。

以前はカタギが暴力団と組めば、利用され骨までしゃぶられるのが常だつた。今はちがう。カタギであることは暴力団に対する優位となり、トラブルが起きたら警察に駆けこんで相手を牽制する。骨まで

しやぶられるのが暴力団の側だつたりする。それでもカタギと組まなければ、暴力団のシノギの多くが成立しない時代なのだ。

暴力団員がカタギに怪我をさせたり殺したりすると、その逆より罪ははるかに重い。それをわかっているから、暴力団員も殺しをためらう。つまり、暴力団が弱体化したともいえる。一方でプロの犯罪者とアマチュアの境界があいまいになり、やくざよりタチの悪い、ルールを知らず守ろうとも考えない、セミプロ集団が生まれている。やくざではないから、傷害や殺人にさほどの理由を必要とせず、犯行後も組織に属していないがゆえに居場所や逃亡先の特定が困難となる。

やくざは組を離れたら生活がなりたたない。だから服役を覚悟で出頭してくる。一方そういう連中は、海外へ逃げ、そこで暮らすのもいとわなしいし、別人や外国人になりすまして帰国する場合もある。組という組織に縛られていないぶん、自由だし、誰かへの義理もない。

そうした犯罪者を増加させたのが、組織犯罪処罰法と暴力団排除条例だと、佐江は思っていた。時代は明らかにかわつたのだ。

だからといって、暴力団が消えてなくなるわけではない。

セミプロ集団は長期にわたつて犯罪をつづけない。犯罪は、短期間で金を稼ぐための手段であつて、生涯犯罪で暮らそうとは考えていないからだ。それゆえ、組織も大きくはならないし、莫大な金を犯罪で得ることもない。

一方、司法の圧力にも耐えて生き残っている暴力団は強固な組織をもち、巨額の現金を動かしている。その金は、国内だけでなく海外にも投資、運用され、さらにふくれあがつて戻る仕組みだ。そのための投資顧問すら、暴力団は抱えている。投資会社やメガバンクにいたような、プロのファイナンシャルプランナーだ。企業よりも早く巨額の資金を動かせることと、成功報酬の大きさに魅力を感じて、暴力団と組んでいる。たとえ損失をだしても、威されたり傷つけられたりする心配はない。資金運用の実態を

握っている人間を、警察に駆けこませるような愚は、暴力団の側もおかさないからだ。

だが投資家から金を集めるようには、暴力団は資金を集められない、典型的なピラミッド構造である暴力団は、下から上へと金を吸い上げるシステムだ。

要は、クスリの密売やみかじめ、売春といった路地裏の稼ぎが集まって、巨額の資金源となっているのだ。その路地裏の稼ぎを取り締まるのが、佐江のような末端の刑事というわけだ。

「セミプロか」

「証拠はありませんが」

白戸の問いに佐江は頷いた。

「すると昔の仲間ともめたか。いつしよにヤマを踏んだ仲なのに、片方は飲食であて、不動産にまで打つてでて羽振りがいい。片方は商売がうまくいかず、『少し回してくれや』という。それにいい顔をしなかつたんで恨みを買ったか」

谷神がいった。佐江は少し驚いて谷神を見た。マル害が高部とわかつた瞬間、まったく同じ考えが佐江の頭にも浮かんでいたからだ。

「だとしても、やつたのは本人じゃないな。振りこめアガリにしちゃ、腕がよすぎる」
白戸がつぶやいた。

「プロを雇ったんでしよう。中国でもアフリカでも、近頃は兵隊崩れがいくらでもいます」

谷神はいつて、佐江を見返した。

「そうじゃありませんか」

「そつちは俺の専門じゃないんで」

佐江は首をふった。

「殺し屋なんてのは、結局は道具です。ドスやチャカといつしよです。いくらバクつたところで消えて

なくなるわけじゃない。金欲しさに、腕のある奴はいくらでもやるでしょう。ハジいて、もらつて、飛べば、それきりです」

谷神の目尻に皺が寄つた。唇は動いていないが笑つたようだ。

「ハジいて、もらつて、飛ぶ、か。うまいことをいうな」

白戸が息を吐いた。

「要は、誰が金を払つたのかつてことか」

「ええ。でも羽振りの悪い奴は、殺し屋を雇えません」

佐江はいつた。

「それも一理ある。すると金を回してもらえなかつた本人がやつたか」

白戸がいうと、谷神が佐江に目を向けたまま答えた。

「極道とちがつてセミプロは自由ですからね。稼いだ金で半年、一年と、海外で遊び暮らすのもいるそうじゃないですか。射撃の腕もそこで磨いたのかもしれない」

「まあ、先入観は禁物だ。地取りでどんな情報があがつてくるかを待とうじゃないか」

白戸は立ちあがつた。佐江はその目をとらえ、いつた。

「私はこれでいいですか」

「申しわけないが、もう少しつきあつてくれ」

白戸は首をふつた。白戸にひつぱられる形で、佐江は検証中の集団から離れた。かたわらに谷神もいる。

「今日は日曜で、このビルの店は営業していない。なぜマル害はここにいたと思いませんか？」

谷神が佐江に訊ねた。どこか試されているようだ、と佐江は思った。

「さあ。通報したのは誰です」

「高部の運転手兼秘書だ。今は新宿署にいる」

「そいつは何と？」

「出資するキャバクラの下見に、このビルにきていた、と。その『キャロライン』で店だ」

「営業中じゃない店を下見に？」

白戸は頷いた。

「店の人間は？」

「社長というのがある。今も店で、巡査がついてる」

「会っていいですか」

白戸の許可を得て、佐江は廊下のつきあたりにある店の扉を開いた。二十坪ほどのフロアは、テーブルが片側に積み上げられていた。椅子だけがなぜか並んでいて、そのひとつにすわったスーツ姿の男が煙草を吸っていた。

かたわらに制服巡査がひとり立っている。

「ご苦労さん」

巡査にいつて、佐江は男に歩みよった。

「ずいぶん店の中がさっぱりしているな」

男は佐江に気づくと、あ、といって煙草をもみ消し、立ちあがった。

「ご苦労さまです」

佐江は男を見つめた。

「会ったことありましたか」

「講習会で顔をお見かけしました。新宿署の刑事さんですよ」

組対は管内の飲食店業者を対象にした講習会を、定期的におこなっている。男はそのとき、佐江の顔

を覚えたようだ。

「佐江といいます」

「元木です。あの、高部社長に出資をお願いすることになって、改装を検討したいんで店をかたづけろといわれたんですよ」

「それでテーブルをどかしたんですか」

元木は頷いた。白戸と谷神は店の入口に立ち、無言でやりとりを眺めている。

「客は？」

「いません。日曜は休みですから」

佐江は積み上げられたテーブルと並べられた椅子のあいだの空間に歩みよった。

「そこがさっぱりしてるのは、ピアノでもおおくか、と高部社長がおっしゃっていたんで」

元木がいった。佐江は床の染みを見つけ、しゃがんだ。手袋をした指先でなぞる。赤く染まった。匂いを嗅いで、元木をふりかえった。

「高部さんは何か飲みましたか」

「ええと、水割り、かな」

「あなたが作ったの？」

「ええ。酒は売るほどあるんで」

元木は薄い笑いを浮かべて答えた。

佐江はしゃがんだまま、店内を見回した。

「もう少し、照明を上げてくれませんか」

「えっ。はい」

元木は立ちあがり、キャッシュャーの奥にあるスイッチに触れた。わずかに店内が明るくなった。

「もつとお願いします」

元木が店内を明るくした。床のいたるところに濡れた染みがあった。

佐江は立ちあがった。元木が不安げに見つめている。

「あなたと高部さん以外、ここに誰かいました？」

「高部さんの秘書の方が二人です」

「他には？」

「いえ」

元木は首をふった。佐江は白戸に目を向けた。白戸が、

「任せるよ」

といった。

「それにしちやあちこちに、酒の染みがありますね。ワインがこぼれている」

佐江は元木をふりかえった。

「きのうが大入りだったんで」

元木は答えた。

「別に日曜に店を開けても、問題はないんですよ」

佐江は元木の目をのぞきこんだ。

「いや、本当に」

「で、あなたはどこにいたんです？ 高部さんが襲われたときには」

「ここにいました。高部さんに電話がかかってきて、でていかれたんです。秘書の方もいつしよでした。廊下で話していたようですけど……」

「銃声は聞きました？」

元木はためらい、首をふった。

「いえ」

「聞こえたでしょう。建物の中はこんなに静かだ」

「いや、あの、有線を流せといわれて、大きめにかけていたので」

「じゃ、何があったのかは、誰が教えてくれたんです」

「秘書の方が駆けこんできて、『社長が撃たれた』って」

「もうひとりの秘書は？」

「高部さんについてました」

「犯人は？ 秘書の人は何かいいました」

元木は首をふった。

「エレベーターの中から撃たれたって聞きました。犯人はそのまま降りていったって」

「キッチンはどこです？」

佐江は訊ねた。元木は入口の正面にあるカーテンを指さした。

「その奥です」

佐江は入った。洗われたグラス類が積み上げられていた。ざつと百くらいある。急いで洗ったらしく、乱雑な積みかただ。

佐江はキッチンをでると元木に歩みよった。

「もう一度訊きます。店には何人いました」

「四人です。俺と高部社長と——」

「嘘はやめたほうがいい。これは殺人だよ。風営法違反とはワケがちがう」

佐江は元木の言葉をさえぎった。元木は口を閉じた。

「事件が起こったとき、百人近い人間がここにいた。そうでしょう」

「いや、店は休みなんです」

「そう、休みだったでしょう。だから通常の営業じゃない」

「じゃ、なんで——」

「SUF」

佐江がいうと、元木は目をみひらいた。

「新宿、アンダーグラウンド、ファイトだっけ、ファイターだっけ？」

「な、何です、それ」

「知らないわけないだろう。地下格闘技戦ってやつだ。近頃はやつてるって聞いているガチンコの格闘で、客は勝つ選手に金を張る。高部さんがその運営にかかわってるって噂があつてね」

佐江は口調をかえた。元木はうつむいた。

「事件が起こったのは、そのまっ最中だったのじゃないのか。ヤバいつてんで客も選手も帰し、大あわてで店をかたした。そんなのはな、ボーイやこのあたりの連中に訊きこめば、すぐわかることなんぞ」

元木は息を吐いた。

「すみません」

「高部を殺^やったのは客か」

「ちがいます」

「じゃ誰だ」

「本当にわかんないんです。電話がかかってきて、社長は出ていったんです。店の中はワアワアすごかつたんで電話の声が聞こえなかつたみたいでした」

「銃声は？」

「本当に聞いてません」

「客は何人いた」

「七十ちよつと」

「選手は？」

「四人です」

「試合は始まっていたんだな」

「第二試合が始まったばかりでした」

「さすがですね」

「谷神がいったので、佐江は質問をやめた。」

「あとはうちの人間が訊きとります」

「谷神は白戸を見た。」

「白戸は頷き返した。」

「何なんです？」

「佐江は歩みより、小声で訊ねた。」

「何だかテストされているみたいなんですが」

「白戸は首をふつた。」

「このヤマはどうせ新宿に帳場が立つ」

「帳場とは特別捜査本部のことだ。」

「でしょうね」

「あんたもそれに入ってもらいたい」

「これはマルBのでいい、とはちがいますよ」

白戸は頷き、癖なのか左耳をひっぱった。

「だが何がしかのプロがからんでいる。ま、セミプロかもしれないが。あんたはそういうのに詳しい」

「組対から何人かひっぱるんですか」

「今のところはあんたひとりでもいい」

「刑事課にだつてマルBに詳しいのはたくさんいます。新宿ですから」

「駄目なのかね」

白戸は不審げに佐江を見た。

「駄目つてわけじゃありませんがね。一課のエリートさんたちと組まされてうまくやっていますかね」

佐江は目をそらした。帳場が立てば、所轄の刑事は捜一の刑事と組んで捜査にあたることになる。

「私が組みます。お嫌ですか」

谷神がいった。佐江は谷神を見つめた。

「いいたいことはあつた。が、もつと合わない刑事と組まされるよりはマシだ。」

「よろしくお願いします」

佐江が答えると、谷神は満足したように頷いた。白戸がいった。

「谷神は二強の副班長だ」

捜査一課には、殺人事件の捜査にあたる九つの強行班がある。警視である管理官の下に警部の各班長がいる。谷神はその第二強行班に属しているようだ。副班長ということは警部補だ。階級は佐江と同じだが、組むとなれば、捜一側、つまり谷神の指示にしたがわなければならない。

谷神は、だが、穏やかな表情で佐江を見つめている。

「元木さんを署に同行してくれ」

佐江は巡査に命じた。元木はあきらめたようにうなだれていた。

「じゃ、いきましようか」

谷神がいった。佐江は驚いて谷神を見た。

「どこへ？」

「地取りです。佐江さんについていきますよ」

「帳場が立つ前に勝手に動いていいんですか。ニワトリだといわれますよ」

非常階段を使って一階に降り、息が整うのを待って佐江はいった。鶏はエサを求めて、あちこちをつつき回る。特別捜査本部では、目撃者を中心に訊きこむ地取り、被害者の人間関係を中心に訊きこむ鑑取りの担当を決め、洩れがないように捜査陣を張る。適当につくだけの捜査は、ニワトリと馬鹿にされる。

「大丈夫です。班長は怒りません。呼ばれたら署に戻ればいい」

谷神は微笑んだ。

管理官の白戸にずつとついていたところを見ると、谷神は捜一でも腕を買われているのだろう。捜一のベテランには、職人気質の刑事が多い。人あたりはよいが、谷神もそういうタイプのようにだ。

「実は佐江さん呼んで下さいと頼んだのは私です」

谷神はいった。

「あんたが」

「ええ。佐江さんの噂を聞いたことがありました。新宿のマルBににらみがききすぎて、動かさない人がいる、と」

「そんなのは嘘つばちだ。動かないのは、俺みたいな下っ端のことは誰も気にしないからです」

谷神は応えずにビルのエントランスに佐江と並んですわった。エントランスの階段の下、立入禁止のテープの外には野次馬がひしめいている。テレビカメラも何台か到着していた。

「最近テレビが早いですよ。どこからか情報が洩れているんでしょうね」

谷神はカメラマンを見やり、他人ごとのようにいつた。肩に担いだカメラを佐江と谷神に向けている。「撮るんじゃない」

佐江は鋭い声でいつた。おかまいなしにカメラマンはレンズを向けてくる。佐江は舌打ちし、顔をそむけた。

「いきましよう」

テープをくぐり、野次馬をかき分けて雑踏に立つた。

あ、といつて谷神が立ち止まった。群がる野次馬の後方から、ビルのエントランスを見上げている。

「ほしはあのエレベーターで七階にあがり、扉が開くと、中からマル害を撃ち、そのままエレベーターをでることなく下に降りたそうです」

「つまり高部の顔を知っていた」

佐江は谷神の横顔を見た。

「そうなります。雇われた殺し屋なら、標的を確認したでしょう」

谷神はエレベーターホールを調べる鑑識係に目を向けていた。

「マル害は撃たれたとき電話で話していた。殺し屋は、電話をかけている男を撃てと指示されたのかもしれない。七階に着き、エレベーターの扉が開いたら目の前にいた。だから撃つて下に降りた」

佐江がいうと、谷神は驚いたようにふりむいた。

「すると電話は、標的をわからせるための罠だったということですか」

「百人近い人間がいるところに入つていつて標的を探しだし撃つのは、簡単じゃない」

「おつしやる通りだ。ところでSUFというのは何なんです」

「そいつをこれから洗いにいきましょう」

佐江はいって歩きだした。どいて、どいてという声が出て、ブルーシートを手にした制服警官が到着し、エレベーターホールを野次馬やテレビカメラからおおい隠した。

佐江は区役所通りを北に向かい、坂を上った。バッテリーセンターの角を左に折れる。「ホテルクラウンアネックス」という建物があった。表向きはビジネスホテルだがラブホテルも兼ねている。

玄関をくぐると、フロントらしき狭いカウンターに坊主頭の巨漢が立っていた。黒いジャージのスポーツウェアを着け、年齢は二十代の終わりだ。

巨漢は入ってきた佐江と谷神を無言で見つめた。佐江はいった。

「支倉はせくらはいるか」

巨漢は瞬きもせず、佐江を見つめた。無言だった。

「支倉だ。いるんだろう」

佐江は返事を持たず、カウンターの奥にある部屋とつながった扉に手をかけた。巨漢がカウンター越しに太い腕をのびし、佐江の肩をおさえた。

「関係者以外、立入禁止です」

かすれた、ひどく聞きとりにくい声だった。

佐江は自分の肩にかけられた手に目を向け、巨漢の顔にゆつくりと移した。巨漢は手をひっこめた。

「いいよ小笠原おがさわら」

カウンターとつながった部屋から声が出た。

佐江は扉を開いた。六畳ほどの小部屋に安物の応接セットがおかれ、長椅子に寝そべった男がノートパソコンの画面を閉じるところだった。派手な刺繡ししゅうの入った白いジャージを着け、のびた灰色の髪を

うしろで東ねている。額の中央に三日月のような古い傷跡があった。

「佐江さんかい。何かでかいことがあつたらしいな」

男は長椅子に寝そべったまま、佐江と谷神を見上げた。白いジャージのパンツは片方の裾が空だった。長椅子のかたわらに義足が立てかけられてある。

部屋の壁にポスターが何枚も貼られていた。

「最強決戦 新宿の夜を制するのは誰だ!？」

「生死不問のデスマッチ SUFFファイナル 今年の新宿の覇者が決まる!」

といった文言が、ファイティングポーズをとる男たちの写真の上で躍っている。日時や会場は印刷されていない。あるのはホームページのアドレスで、あらかじめアクセスできるコードをもった会員だけが見られる仕組みだ。

「今日、試合があつたらう」

「あつたが、うちはでてない」

「お前もいたのか」

「いや。ザコ戦だからよ。見てもしょうがないと思つてここにいた」

男は答え、パソコンの横においた煙草の箱から一本抜き、火をつけた。煙を天井に吹きあげる。

「ザコ戦?」

「ライト級なんだよ。ガキの殴り合いとかわんねえ」

「でていた選手の名前はわかるか」

パソコンの画面を起こすと、男は煙草をはさんだ指でキーボードに触れた。パソコンを回し、画面を佐江に向ける。

「SUFLライト級、第三戦、昨年度チャンピオンにプロレスラーが挑む!」

という文字がフラッシュしている。その下に出場選手の名が並んでいた。

「会場『キャロライン』、ゴング開始午後七時」とある。日付は今日だ。

「プリントアウトしろ」

佐江はいった。男が言葉にしたがい、部屋の隅にあるプリンターが紙を吐きだした。佐江はそれをつまみあげ、谷神に渡した。

「プロモーターは誰だ」

佐江は男に訊ねた。男は首をふった。

「知らねえ」

「レスラー抱えるお前が知らないわけではないだろう」

「SUFてのはよ、試合ごとにプロモーターがちがうんだ。昔のダンパといっしょだ。わかるか。デイスコを借りてパー券を売り、アガリをとる。誰にでもできるわけじゃないが、事務局と話をつけられる奴なら、会場さえ押さえりゃ、試合を開けるんだよ」

「事務局てのはどこだ」

男はパソコンを指先でつついた。

「こん中だ。メールでやりとりをするだけだ。プロモーターをやりたいて奴と話が決まると、事務局が登録されているレスラーに出場の意思を確認する。でたい奴は、当日会場にいつてファイトマネーをもらう。そこに事務局はこない」

「じゃあ事務局はどうやって稼ぐんだ？」

「プロモーターからアガリの二割をとる。金は銀行振込だから、顔を合わせない」

「プロモーターや選手がパクられたらどうする」

届出のない会場での地下格闘技戦は、消防法や風営法に違反している。その上、勝利者を賭けさせる

のだから賭博開帳図利だ。

「メルアドがかわつてそれきりだ。海外のサーバーを通してるから、まず見つけられないだろうよ」

「銀行口座は」

黙っていた谷神が訊ねた。

「決まつてる。トバシだよ」

トバシとは、架空名義や金で売られる無関係な人間の口座だ。

佐江はパソコンの画面を見つめた。

「入場料二万円、ドリンク飲み放題、おつまみつき」とある。

百人の客で売り上げは二百万円。アガリの二割といったところで四十万円だ。月に一試合あったとしても、たいした稼ぎにはならない。地下格闘技だけに、何千、何万という観客が入れるような施設は使えない。

「たいして儲からないじゃないか」

「趣味みたいなもんだ、やつてる奴の。格闘技好きのオタクじゃないかって俺らはいってる」

男は答えた。

「事務局の人間と会つたことはあるか」

「ないね。プロモーターはだいたい七、八人の中で回してた。プロモーターのほうが稼げる。観戦料か

らのバックはともかく、ベットがあるからな」

ベットとは賭けのことだ。百人の観客のうち、半数以上は勝者をあてる賭けに参加する、と男は説明した。

「どれくらい儲かる」

谷神が訊ねた。

「さあな。俺はプロモーターをやったことはねえからな。二、三百でところじゃねえか」

「それなら悪くはないな。ケツモチは？」

男は佐江を見た。

「誰だい、この旦那。新宿じゃねえな」

「いいから答えろ」

佐江はうながした。

「ケツモチはいねえ。客の中にやくざ者はいるかもしれないが仕切りはちがう」

「新宿でそんなことが可能なのか」

意外そうに谷神がいった。

「時代がかわつたんだよ。やくざ者にガタくれられたらさつきと試合を畳んじまう。プロモーターだつて、いざとなりや一〇番だ。ベットの現場をおさえられさえしなけりや微罪だろ。やくざに上前ハネられるよりよほどマシだ。やくざにとつちやおもしろくないだろうが、奴らは事務局と話をつけられない。レスラーを集められなきや、試合は打てない」

「なるほど。そのためのインターネットか」

谷神はつぶやいた。

「大阪でも似たような団体が旗揚げしたが、まんまとやくざに乗つとられたらしい。けど、ネットでバツクにやくざがいるつてのをバラされて、レスラーも客も逃げ、潰れちまつたつて話だ。いくら威しても、ネットの書きこみは止められないからな」

「プロモーターの中にもやくざはいないのか」

佐江は訊いた。

「盃さかずきもらっているのはいないんじゃねえか」

「高部はプロモーターだったのか、今日の試合の」

佐江はパソコンを目で示した。

「高部？」

「高部齊だ」

「ああ、高部さんね。だったかもしれないねえな。他の試合でやってんのを見たことはある」

「事務局にアクセスできるか」

佐江はいった。男は首をふった。

「いや。一時間前からできなくなってる。この画像は、前に落としくんでおいた。ふつうなら試合結果が表示される筈だが、それもねえ。しばらくはこっちから連絡がつかない。参っちゃまう。小笠原の体がようやく仕上がったのによ」

男はカウンターの方角を目で示した。

「事務局と連絡がつくようになったら知らせてもらえるか」

谷神が訊ねた。

「はあ？」

男はあきれたようにいった。

「なんで俺がそんなことしなけりやいけねえんだ」

谷神はとまどつたように男を見つめた。

「これまでであったことを話してやるのと、これから協力してやるのとは、まるでちがう。あんた勘ちがいするなよ。俺は犬じゃねえ」

佐江を見やり、眉根を寄せた。

「変なの連れてくるなよ」

「もういい。忘れろ」

佐江は谷神をうながした。

「いきましよう」

ホテルの玄関をでると、谷神は苦笑いし、首をふつた。佐江はいった。

「失礼をしました」

「いえ。さすが佐江さんです。あなたでなければ、歯が立たなかつたな」

「あいつああ見えてマトモなんです。親が昔からここでホテルをやっていますね。レスラーになつたんだが、バイクの事故で片足を失くして、今はトレーナーを趣味でやっている」

「なるほど」

谷神の懐で携帯電話が鳴つた。とりだし耳にあてた。

「谷神です」

佐江の携帯も鳴つた。前田だつた。

「帳場が立つ。戻ってくれ」

佐江は谷神と顔を見合わせた。

5

あんたどこ泊まつてるの、と訊ねたユリ江に、サチコの娘は微笑んだ。

「友だちの家。ママがユリ江に会いなさいといったからきました」

「友だちって——」

「日本に留学しているタイ人」